山　形　大　学　紀　要（教育科学）第14巻　第３号　平成20年２月
Bull. of Yamagata Univ., Educ. Sci., Vol. 14 No. 3, February 2008

成人音楽活動に関する一考察

－アマチュア・オーケストラの活動を中心に－

鈴　　木　　　　渉
地域教育文化学部　文化創造学科
（平成19年10月1日受理）

要　　旨

本論文は、成人の音楽活動、とりわけアマチュア・オーケストラの実態と課題を明らかにし、その今後のあり方と支援の方策について提言することを目的としている。

そのために、筆者自身が参画し活動しているＨシティオーケストラを事例にして調査し、考察してまとめた小論である。とくに、アマチュア・オーケストラに参加する人々の、演奏および練習への意欲等について明らかにした。そしてさらに、望ましいオーケストラの活動のあり方についても調査し、団員の望む活動への方向を明らかにした。

また、東京西部の多摩地区で活動する44楽団に調査の対象を広げて、そこから各団体に共通するオーケストラ活動の課題を、とくに募集する時のパートの側面から明らかにしながら、成人音楽活動のあり方、支援の方策等について考察した。

問題意識と研究の手続き

本論文は、成人の音楽活動、とりわけアマチュア・オーケストラの実態と課題を明らかにし、その今後のあり方と支援の方策について提言することを目的としている。そのために、筆者自身が参画し活動しているＨシティオーケストラを事例にして調査し、考察してまとめた小論である。

調査の対象は東京西部の多摩地区で活動する44楽団のなかでＨ市で活動している５楽団のうちの３楽団、そしてそのなかからＨシティオーケストラを特定し、これをサンプルとして楽団の結成、活動の実態、同時に楽団員の取り組みへの意識等を明らかにし、成人音楽活動のあり方、支援の方策について考察した。

まず、なぜオーケストラに着眼したのか、その理由についても述べておきたい。成人の音楽活動においてその多くは、集団を構成する人々が参加しやすいように、選曲や編成などを工夫しているところが多く、これも大切な音楽振興への支援へのあり方であろう。たとえば器楽合奏の場合、身近で手軽な楽器を用いて集まることになれば、音楽構造のうえにおいてはおもに低音部分の補充を考えながら編曲することにより、編成上の課題について解消を図りながら、高い技能を必要とせずに満足のいく音楽が得られることになるわけである。ところがオーケストラの活動は、音楽を集団に合わせるのではなく、集団が音楽に合わせなければならない活動であるといえる。なぜ音楽に合わせなければならないのかは後述するとして、むろんアマチュア・オーケストラには様々な活動のあり方がある。過去にはより優れた技能を追求してプロとしての楽団に転じた管弦楽団もあり、またその一方で、技能の獲得には急がずゆっくりと楽しみながら活動している楽団もあり、また、地域のイベントや地域の諸施設での演奏活動を大切にする楽団もあるなど、その目的や活動のあり方などもさまざまであり、このあり方こそが楽団の特徴となっているのである。

つぎに、なぜ集団が音楽に合わせなければならないのか、その理由を明らかにしておきたい。端的にいえば、すべて管弦楽曲の編成にあるといえよう。第１に、およそハイドンの古典派の時代からショスタコービッチなどの近・現代に至るまでの150年を越える歴史的経過のなかでは、楽器編成は次第に増え続け大型化している[1)]。また、たとえ同じ年代の同一作曲者の作品であっても、作品が違えば楽器編成が異なることもあり[2)]、取り組む楽曲により常に楽器編成は変動し、その結果、演奏には参加できなくなる団員が出ることもあるわけである。第２に、たとえば吹奏楽の楽曲では、パートにより人数の重複はバランスを配慮できれば可能であるのだが、オーケストラの管楽器編成は、交代要員としてのダブルキャストは許されても、とくに指定されていないかぎり重複することはないという点にある。そして第３に、吹奏楽曲では楽団において欠ける楽器を他の楽器で代用することはよくあることだが、管弦楽曲ではまず考えられないことである。

このように、管弦楽曲では厳格なまでに作品のオリジナルを重視するために、楽団の都合によって編成を変えることはしない。また逆に、楽団員全員が参加できるようにするために現員の編成を優先すれば、これに見合う楽曲を探す以外ないのである。つまり、成人の音楽活動であるからといってオーケストラの編成自体を無条件に変更するわけにはいかない。この点が、アマチュア・オーケストラの運営上最も困難な点であるといえよう。そこでこのような、音楽として妥協を許さない厳格な条件のもとで、活動に挑む意欲は何か、また、団員はどのようにして自ら音楽に近づくのか、そしてそこからはどのようなる音楽

が生まれるのかなどを明らかにしたい。

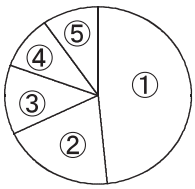
1　オーケストラへの参加と演奏の意味

まず、オーケストラに参加する人々はどのような意識をもって活動しているのかを明らかにするためにアンケート調査を行った。それは、Hシティオーケストラの方々の協力のもとに、2007年5月13日であった。回答は団員41名のうち32名（78%）であった。

(1)　音楽活動と日常の生活

入団する前と入団してからでは、自分の気持ちや生活面への変化などについて問うたところ、回答は①「大きく変化した」８名、②「やや変化した」23名、③「あまり変わらない･変化はない」1名、という数値であった。そのうち①・②と回答した人について、再度質問をしたところ、以下の結果となった。

自分の気持ちや生活面で変化したものを、とくに挙げるとすればどれですか？（○1つ）	計	率
①音楽に取り組むことにより目標ができて、以前より生活に張り合と夢ができた。	15	46.9%
②やりたかった音楽ができるようになり、音楽にあふれた生活によって潤いができた。	6	18.7%
③新たな仲間ができたので、自分の行動範囲や世界などが広がった感じがしている。	4	12.5%
④自分の積極性や行動力、あるいは技能の上達の面など、自分への新たな発見に繋がった。	3	9.3%
⑤その他　・ストレス発散。/・自分の居場所が増え、オケで心が癒される。/・仕事と休日が切り離せた。	3	9.3%

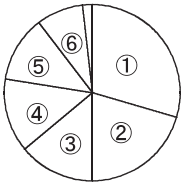


「音楽に取り組むことにより目標ができて、以前より生活に張り合と夢ができた」とする、生活全般への変化を示した回答が46.9%を占めている。さらに、音楽に対してより強い意欲と愛着を示したと思われる「やりたかった音楽ができるようになり、音楽にあふれた生活によって潤いができた」とする④の回答を合計すると、65.5%が楽団への参加によって生活・意識が変化したことになる。以下、合計すると30%程度となる②、①、⑤では、新しい仲間づくりや自分の行動範囲の広がり、新たな自分の発見、ストレス発散、新たな自分の居場所、休日の有効活用など、音楽以外の変化を認めている。

(2)　オーケストラの鑑賞と合奏による表現

オーケストラへの参加にはどのような喜びがあるのか、すなわち参加への意識について明らかにする質問である。この結果からは、上位の３項目である①、②、③のいずれも、音楽や作品を知りたい、近づきたい、そのなかに包まれたいという気持ちが回答となっている。

オーケストラに取り組んで、ライフ･ワークとして有意義な時間を過ごしていると思いますが、その最も喜びとするところは何ですか。（○２つ以内）	計	率
①合奏練習や演奏会などをつうじて、音に包まれたなかでともに合奏できること。	17	29.3%
②音楽を聴くだけの立場とは異なり、演奏する側面から音楽や作品をみることができること。	12	20.6%
③多くの作曲者や作品などを演奏することにより、様々な音楽について学習できること。	8	13.7%
④音楽をつうじて、楽団の仲間との交流やコミュニケーションを図ることができること。	8	13.7%
⑤演奏会をめざし練習し、そしてステージに乗って演奏できること。	7	12.0%
⑥おもに楽器の演奏技能など、自分自身の音楽的な力を伸ばすことができること。	5	8.6%
⑦その他　Br：ストレス解消。	1	



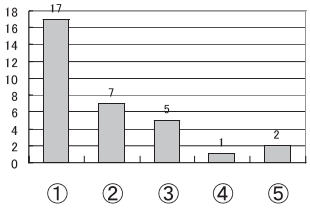
２つ以内の○で、回答総数の60%以上の率であることは、ほぼ全員がそのいずれかに○をつけていることになるだろう。すなわち、オーケストラの演奏を鑑賞するだけではなく、自ら楽曲を演奏するなかで作品と触れあい、オーケストラを自分の手にしたいと行動している、積極的な姿勢と意欲をここから読みとることができる。

(3) 表現技能と練習時間

オーケストラに参加したならば、合奏練習こそ楽しい時間になるであろうと思われる。しかし活動日以外の練習は一人である。そこで一人で練習するときの原動力は何かを問うたものである。

ひとりで練習している間にも喜びはありますか？それは、どんな時ですか？（○1つ）	計	率
①苦労して練習し、弾（吹）けるようになった時など音楽を自分のものにしたようで嬉しい。	17	53.1%
②練習時間が確保できること、また練習している時間そのものが至福の時である。	7	21.8%
③練習する時は、常に何かに追いかけられているようで、楽しむ余裕などない。	5	15.6%
④練習などには、とくに喜びを感じることはない。	1	3.1%
⑤その他 Br：音楽の中にいる満足感と、めざす音を求め続ける飢餓感が混在する。 Br：体力の向上。多少なりとも log tone や Hight tone が出るようになったとき。	2	6.2%

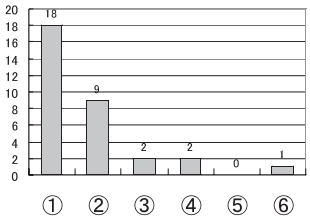
なかでも高い数値は、楽器を弾けるようになったという達成感や、弾けるようになりたいとする向上心、ないしは技能獲得への意欲に関する答えを出した人は17名である。つぎに「練習が確保できること、練習時間そのものが楽しい」とする7名がこれに続く。また、練習のなかで「楽しむ余裕などない」と答えた5名については、楽団内の支援が必要と思われる。



(4) 全体練習の意味と楽しさ

全体合奏の練習における楽しさは、以下のどれに該当しますか。（○1つ）	計	率
①合奏の音に包まれた中にわが身を置き、その一員として演奏しながら楽しんでいる。	18	56.6%
②合奏のなかのアンサンブルや他のパートなど（指揮を含む）、合わせることに喜びを感じる。	9	28.1%
③自分のパートの出番やソロの部分などに、奏でる喜びを感じながら演奏できること。	2	6.2%
④演奏する曲の音楽の流れや、変化を感じながら演奏できること。	2	6.2%
⑤とくに、これといった楽しさは見あたらない。	0	0％
⑥その他 Br：学生時代に若干なりとも戻れる。	1	3.1%

練習日は月に３～４回程度、間隔としては週一度の全体の合奏練習となる。この全体の合奏練習のなかで、どのような喜びがあるかについてをみると、要約すれば、①の「音楽に包まれた中にわが身をおく」楽しさということだが、②の「合わせることの喜び」を合計すると84％に達する。この合計した数値がいわば、合奏そのものが楽しいということであり、その喜びこそが楽団に結集する根源的な力となっていることがわかる。



(5) 合奏と練習への要求

オーケストラに参加する喜びは、「合奏練習や演奏会などをつうじて、音に包まれたなかでともに合奏したい」とする気持ちである。つまり、好きな音楽作品にもっと近づきたい、もっと知りたい、そして自らがその曲を演奏しながら音楽を合わせたいとする気持ちであり、それは、合奏をしたいとする気持ちの表れでもあるだろう。だが入団により生活に張り合いと夢が持てるようになっても、日々の練習時間は一人である。自己練習はどのような意識によって支えられ、日々の練習のエネルギーになっているのだろうか。

それは第1に向上心である。すなわち､音楽を自分のものにしたいとする気持ちであろう。そして練習により、弾（吹）けるようになった時の達成感がこれを支えているように思える。ただし、この一人練習も、楽団への入団以前と入団後とでは、意識に大きな開きがあ

ると思われる。入団以前は、いつ・どこまで・どの程度まで練習すべきなのか、といった技能を高めるめあてがなかったからである。

第２に、楽団に参加したことで週ごとの活動日に向けて練習することになるという、週単位の生活のリズムができたこと、また活動日の合奏を想い描き練習できること、この二点が、学習意欲を促進し技能習熟に効果的であったと考えられる。

そして第３は、「練習時間が確保できること、また練習している時間そのものが至福の時である」とする気持ちである。日々の仕事や生活に忙しい人にとっては、技能を習得しその成果を期待するよりも、自分だけの時間が持てたこと、次回の合奏を想い描きながら練習している時間そのものが大切なのである。

２　音楽学習の経験とオーケストラ運営の課題

ここでは、楽団に所属する人々の学習経験を問うなかで、過去の音楽経験がどのようにしてオーケストラに取り組むエネルギーになったのか、またこれまでの音楽教育がどのような学習効果を上げたのかを明らかにしたい。

(1)　音楽学習の経験と音楽活動の促進

つぎの表は、年令を追って各自の音楽学習の経験について、記述式で書いたものを表にまとめたものである。したがって、一人であっても経験年令を追って複数記載している。左半分は学校における音楽の学習経験だが、クラブ･部活動等についての記載であって授業は含んでいない。また一方の右半分は、学校以外の活動について12歳以下の小学生までの時代と、13歳以上の中学生から成人に至るまでの音楽活動を分けてまとめた。この年令で区切った理由は、幼児期の音楽学習と再び自分の意志で取り組み始めた時期を比較するのに都合が良いからである。

	小学校	中学校	高　校	大　学	校外 12 歳以下	校外 13 歳以上
弦楽器	9-S Cors	音楽専科に Pi	15-HS Orc(Vln) 15-HSB(Trp)	19-UOrc(Vln) × 2 19-UOrc(Vla) 19-UOrc(Vc) 19-U-Cors × 2	4-Pi(Erc Or?) 5-MS(Erc Or) 5-MS(?)・6-Pi 5-Vln5-Pi 6-MS(vln) × 2 6- 琴・7-Pi 6-Pi × 3 8-Pi × 2 8-MS(Vln) 10-JOrc(Vln) 12-MS(Vln) 12-Erc Gt	16-Vc 19-J Orc(Vln) 19-Cle(Cors) 19-UOrc(Vln) 19-Y Jazz Pf 20-MS(Vln) 24-MS(Vc) 24-MS(Vln) 30?-Vln 36-MS(vln) 40-Vln 46-Vln
	１人	１人	２人	６人	１６人	１２人
管・打楽器	10-SB(Corn) × 2 10-SB(Xyp)	12-SB(Fl) × 3 12-SB(Cl) × 2 12-SB(Trb) × 2 12-SB(Hor) × 2 12-SB(Obe) 12-SB(Per) 12-S Cors 13-SB(Sax) 13-SB(Hor)	15-HSB(Hor) × 2 15-HSB(Fl) 15-HSB(Obe) 15-HSB(Cl) 15-HSB(Fg) 15-HSB(Trp) 15-HSB(Trb)	19-UB(Obe) 19-UB・Orc(Hor) 19-UB(Trp)	3-MS(?) 4-Pi 4-MS(Erc Or) 6-Pi × 3 10-Pi	15-ErcBD 16-ErcBD 17-Gr 18-ErcBD 23-BB(Hor) 26-BB(Hor) 28-BB(Fl) 40-MS(Cl) 44-MS(Cl) 50-MS(Trp)
	３人	１４人	８人	３人	７人	１０人
全体		管･打 87.5%	管･打 50%		弦 100%・管 43.8%	
略の例	・記載頭の**数字は年齢**　・Pi: ピアノ　・ErcOr: 電子オルガン　・SB: 小学校音楽ｸﾗﾌﾞ　・HSB: 高校吹奏楽部 ・ErcBD: エレキバンド・MS: 音楽教室　・SB: 中学吹奏楽部　・UOrc: 大学オーケストラ・UB: 大学吹奏楽部 ・BB: 市民吹奏楽団　・S Cors: 小･中学校合唱ｸﾗﾌﾞ（部）　・HS Orc: 高校オーケストラ　・JOrc: 青少年オーケストラ					

記載は12歳以下と13歳以上を分けたため、13歳以降も継続している人については、あらためて記載はしていない。ただし、その後の新たな動きをしている12名については、13歳以上の欄にあらためて記載している。

記載項目の頭の数字は年令、またカッコ内は、取り組んだ楽器等、×数字は該当する人数を表したものである。その他は表の下に付した略の例を参照されたい。

弦楽器の人々に見られることは、家庭の勧めかあるいは自らの取り組みにより、早期の音楽学習に取り組んでいることである。少なくとも12歳までに、音楽教室（MS）あるいはピアノ（Pi）教室に通っている人が14人、さらに10歳でジュニアオーケストラで活動したり、12歳でフォークギーターを始めている人がそれぞれ1人いる。学校での活動は、義務教育段階ではほとんど見られず、大学あるいは成人になる前や、なってから自ら音楽を始めたという経過を辿った人が多い。

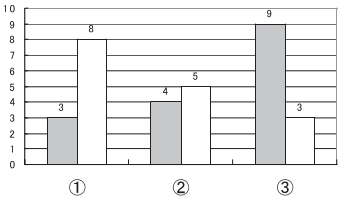
管・打楽器について見られることは、早期の音楽学習は比較的少なく、逆に中学校・高校において吹奏楽部で取り組んだ経験から今日も続けているケースがほとんどである。とりわけ、中学校時代で吹奏楽を経験した率は、現在も管・打に籍を置く団員のおよそ87％以上が取り組んでいたことになる。すなわち、中・高校の吹奏楽部の活動経験が、その後の音楽活動につながっているわけで、逆に弦楽器にとっては学校で音楽の活動から合奏を経験することなく、大学時代ないしは社会に出てから自ら進んで取り組んだ人が多いことを表しているといえる。

(2)　弦楽器と管楽器の自己訓練

弦楽器に取り組む人と管・打楽器に取り組む人の、音楽学習の経験そのものが大きく異なっていたことから、楽団に入団し活動していることと、個人レッスンを受けた経験の有無などについて、その関連はどのようになっているのかを、これもセクション別に集計してみた。

左棒（灰色）は弦楽器・右棒（白）は管打楽器

あなたは楽団に入り演奏技能を補うため、外部の個人指導を受けたことがありますか？（○1つ）	St	Br	計
①個人レッスンを受けたことはない。（楽団内のレッスンは除外）	3	8	11
②過去に受けたことがあった。	4	5	9
③現在も個人レッスンを受けている。	9	3	12

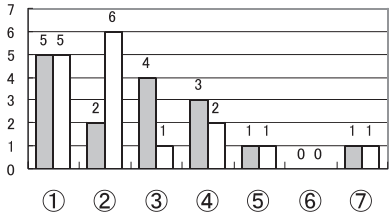


数値の差は、音楽学習の経験そのものの違いと同じように、レッスンの経験の有無にも同様に現れている。弦楽器は「受けたことがない」が少なく、「現在も受けている」が多い。それに反して、管・打楽器は「受けたことがない」が多く、「現在も受けている」が少ないという、まったく逆の勾配を描く結果となっている。すなわち、管・打楽器は、過去の吹奏楽における活動経験から、ある程度蓄積した技能を持ち合わせているので、自己練習だけで対応が可能であったことが考えられる。それに反して弦楽器は、現在もなおレッスンを受けている人が多いということは、楽団で取り組んでいる楽曲に対して、現在もなお様々な演奏技能を要求されているためであると考えられる。

すでに知られるところであるが、管弦楽曲における弦楽器と管打楽器の負担度の差は、譜面のページ数の違いからみても十分に納得できることである。たとえば、管楽器では最も合奏に加わる時間が多いと思われる第一フルート・オーボェ・ファゴットのパートが、仮に３ページ程度ある楽曲であるならば、第一・第二バイオリンの譜面は10ページ程度か、あるいはこれを超えるのはごく普通のことである。

(3) 練習と環境の条件

ひとりで楽器を練習するうえで、環境や条件として苦労していることは何ですか。（○1つ）	St	Br	計
①練習する時間が十分に確保できないので、上達させるために苦労している。	5	5	10
②住宅事情から、練習時間が制限されたり、あるいは練習場所がないなどの苦労がある。	2	6	8
③練習はしているつもりだが、なかなか上達しないので気が重くなることがある。	4	1	5
④もっと上手になりたいとは常々思っているが、とくに練習上の悩みはない。	3	2	5
⑤健康上または疲労などの理由により、練習時間を制限しなければならない。	1	1	2
⑥身近に教えてくれる人がいないので、思うように練習がすすまないことがある。	0	0	0
⑦その他　St：もっと練習しなければと思うが、歳のせいか億劫になる。 Br：楽器が大きく音も大きく、身近においておくことができない。	1	1	2

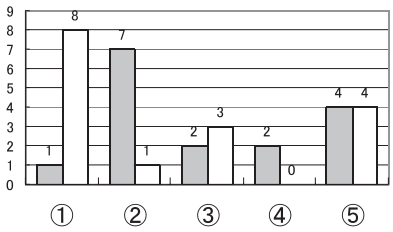


ひとりで楽器を練習するうえで苦労していることについて質問したものだが、このデータからは、弦楽器と管打楽器の回答には同一の部分がある反面、②と③にくい違う部分があることが興味深い。

練習するうえでの苦労について、「時間がない」は弦・管打同数であるが、弦楽器では「なかなか上達しない」が、管打とはわずかな差ではあるが、気になるところである。管打楽器では「住宅事情」が最も多く、楽器の音が大きいことや、大型楽器ゆえに置き場所の問題もあるようである。

(4) 練習と技能習得

ひとりで楽器を練習するうえで、技能の獲得の面で苦労することは何ですか。（○は1つ）	St	Br	計
①楽器そのものの奏法（音程･音色を含む）などについて、改善しているのかがはわからない。	1	8	9
②楽譜がなかなか読めないこと。リズムが取れないこと。テンポのなかで対応できない。	7	1	8
③指使いがわからない、あるいは指がテンポのなかで対応できないこと。	2	3	5
④技能を獲得するうえで、とくに苦労していることはない。	2	0	2
⑤その他 St：コンバスの教則本や参考書などが少ない。／St：複雑なフレーズで音色が悪くなり、助言を求めたくなる。／St：イメージはあるが、ボーイングが思うようにいかない。／St：年令とともに、動きが鈍くなってきた。／Br：しっかりとした息を吹き込めば上達が早いが、その環境にない。／Br：体力の低下、時間的制約。／Br：奏法上の悪い癖が出てしまう。／Br：楽器を身近に置けないので、習慣としての練習ができない。	4	4	8



ここでは、ひとりで練習をするうえで技能の面での苦労をたずねたものだが、回答としては、弦楽器と管打楽器の奏法において、気を配る点がまったく違うという点がよく現れている。

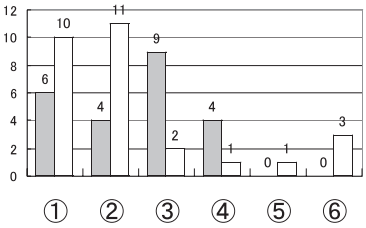
弦楽器についての回答は②「楽譜がなかなか読めない…」に集中しているが、これは初心者レベルと同様の「楽譜が読めない」という意味ではないと思われる。２の（1）で明らかなとおり、弦楽器のうち75％が小学校以前から音楽に取り組んでおり、管打楽器の20％を下回る数値と比べると、むしろ多数の人が早期に取り組んでいるので経験は豊かなはずである。したがってこれは、複雑な音の動きの把握が容易でないこと、練習すべき楽譜の分量が多いことなどが理由と考えられる。

一方管打楽器は、常に音程や音色に神経を注いではいるが、改善されているのかわからない、と回答する人が最も多くなっている。管楽器は吹き方のわずかな差により音程や音色が変わるために、このような指摘は大切であると考える。

(5) 弦楽器と管・打楽器の基礎練習とオーケストレーション

ひとりで練習するときに「気をつけて練習するか」についても、弦楽器・管打楽器には大きな違いが明らかになっている。

自分ひとりで練習するときに、何に気をつけて練習をしますか？（○2つ以内）	St	Br	計
①曲をCDで聴くなど、曲全体の把握と音楽づくりを考えながら練習する。	6	10	16
②練習の始めなど、フォーム･音色･音程など基礎的な技能を向上させるための練習。	4	11	15
③とにかく間違わずに弾（吹）けるための練習で手一杯、他のことはあまり考えられない。	9	2	11
④アンサンブルを想定し、他のパートの音も思い浮かべながら練習する。	4	1	5
⑤演奏曲の練習には、基本的な発想記号、曲想を大切にした練習を心がけている。	0	1	1
⑥その他　Br：体力の向上。／Br：メトロノームを使う。／Br：好きな曲を吹く。	0	3	3

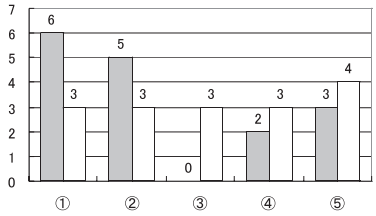


管打楽器については、まず②のフォーム、音色、音程などの基礎的な練習をした後に楽曲の練習に入るという順番まで、この結果からはっきりする。もともと管弦楽曲は、弦楽器あっての管打楽器として発展してきた過程からも明らかなように、弦楽器なしでは楽曲の全体像を把握しきれないことが多い。その際には、CDを聴きながらの練習が効果的となるようである。

それに対し弦楽器は、このさき定期演奏会が近づけば「CDを聴くなど、曲全体の把握と音楽づくり」を考えて練習する人も増えてくることもあるだろうが、「三ヶ月前を想定」という条件のもとでは「とにかく止まらず、間違わずに弾けるようにするための練習で手いっぱいで、他のことはあまり考えられない」という状態にあるといえる。

(6) 弦楽器の自己訓練の特殊条件

全体合奏の練習において、最も苦労する点は何ですか（○1つ） ただし、譜面渡し2ヶ月後で定期演奏会3ヶ月前を想定	St	Br	計
①休符の小節数を数えてわからなくなることがあり、出番に落ちてしまうこともある。	6	3	9
②周囲と合わせることに夢中になると､一人で練習した時の成果が十分に発揮できない。	5	3	8
③他のパートと音程が違うことがあるので、どれが正しい音程なのかわからなくなる。	0	3	3
④自分の楽器の音が聞こえなくなり、冷静に奏でることができなくなることがある。	2	3	5
⑤その他 St：難しい箇所では弾くことで手いっぱいで、ダイナミックスや表情などが疎かになる。／St：別に苦労はない。／St：自分自身で表現したいことと、指揮者の求めることが異なること。／Br：管と弦、あるいは弦の中でもデンポがずれている時、いくつものずれに対してどこまで自分が流れにさおさすべきか迷う。／Br：自分の音程が悪い。息が続かない。苦手な音が出ないときがある。／Br：体力の消耗。／Br：曲あるいは1st･2nd等により、ヘ音記号・ハ音記号と記譜が変わること。	3	4	7



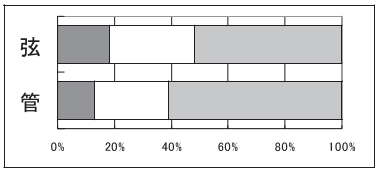
全体合奏で苦労する点について聞いてみた。楽譜提示直後と演奏会の直前では回答の数値に大きな違いが出ると思われたので、これも時期を限定した。

ここでは、管打楽器の数値が平均化しているのに比べて、弦楽器はやや偏りが見られる。特に数値の偏りは、①の休みの小節を数えながら合奏に加わるタイミングを待つことについての記述である。管打楽器の奏者にとってはごくあたり前のことになっている小節数を数えながら加わるタイミングを待つことであるが、弦楽器は休みの小節は比較的少なく弾くことが多いために、小節を数えながら合奏に加わるタイミングを待つことに慣れていないと思われる。③の音程の判断の迷いについては、同じパート

に複数の人が必要な弦楽器ではまったく問題にならないが、それに対して、②「合わせることに夢中になると、練習の成果が発揮できない」が多くなっている。

(7) 自己訓練と全体合奏

左から棒濃色はパート、白はセクション、薄色は全体



	パート練習		セクション練習		全体練習		合計
St 弦楽器	0	2人	2	6人	3	2人	
	1	6人	3	5人	4	2人	
	2	3人	4	3人	5	7人	
	3	4人	5	2人	6	1人	
	4	1人			7	4人	
	指数	1.8	指数	3.0	指数	5.2	10
Br 管打楽器	0	6人	0	1人	2	1人	
	1	4人	1	1人	4	1人	
	2	4人	2	6人	5	4人	
	3	1人	3	4人	6	4人	
	5	1人	4	3人	7	2人	
			5	1人	8	3人	
					10	1人	
	指数	1.3	指数	2.6	指数	6.1	10

ここでは、「楽団で行う集団の練習を“10”とすると、あなたにとって望ましい練習のバランスは“○対○対○”ですか（譜面渡し２ヶ月後で定期演奏会３ヶ月前を想定）」という質問をした。すなわち「パート練習」と、弦と管打が分かれる「セクション練習」、そして「全体練習」の対比を聞いたものである。その数値からは、弦楽器は負担度が大きいためにできるだけ細かい練習をしたいという思いから、より小規模なパートおよびセクションの練習にウエイトをかけてほしいとする気持ちが込められているように見える。管打楽器はその逆で、弦楽器が存在してこそ音楽の輪郭が見えてくるので、合奏のなかで練習したいという思いがうかがえる。そこで見過ごしてはならないことは、管楽器の人のなかには、パート練習は必要ない、すなわち対比では「ゼロ」とした人が６人にも及んだことである。つまり、楽曲の全体像を把握しながら練習しなければ、練習にならないパートもあるということの現れであろう。

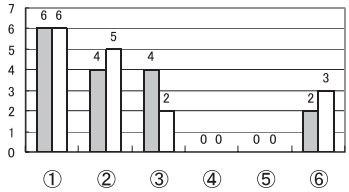
以上、主に弦楽器群と管打楽器群の音楽学習の経験の違いや、練習の視点や課題意識の違いなどを見てきた。そのなかではとくに、弦楽器は管打楽器に比べて演奏する小節の分量が多く、メロディーやパッセージの動きも多く、その負担度も大きいと思われる。そのために、とにかく間違わずに弾けるようにするための練習や、周囲と合わせることで精一杯である、といった余裕のない状態にあるといえるのではないだろうか。

(8) 合奏の楽しさ

あなたの技能とオーケストラの要求レベルとの関係は、以下のどれに該当しますか。（○１つ）	St	Br	計
①だいたいほどよいレベルで、まあまあ付いて行っていると思っている。	6	6	12
②私もあまり上手くはないが、これも“楽団のレベルの一部”と開き直って楽しんでいる。	4	5	9
③楽団の技能のレベルに付いて行けるか、日ごろ奏でる音も萎縮しがちで、とても不安である。	4	2	6
④選曲などは易しい曲ばかりで、音楽の要求水準も低く、私にとっては物足りないことも多い。	0	0	0
⑤私には余裕があるので、練習では音楽でリードしたり周囲に教えたりすることも楽しい。	0	0	0
⑥その他 St：多少の余裕はあるので、あまり自分を主張しないようにしている。／St：要求水準が低いわけではないが、さらに高い水準の曲をとりあげてほしい。／Br：まだ上手でないことも多い。１年ずつ上手くなりたい。／Br：どんなに易しい曲でも100求めれば厳しいが、総じてもの足りなさは感じる。／Br：入団して間がありませんので、よくわかりません。	2	3	5

楽団員の技能とオーケストラの要求に対する意識では、その違いが現れるのであろうか。「自分の技能と、このオーケストラの要求レベル」については、意外にも負担度の差は現れず、弦楽器と管打楽器ともほぼ同数である。つまり、物理的な負担にはなっても精神的にはそれほど負担感は

左棒（灰色）は弦楽器・右棒は管打楽器



ないようである。これも、練習に対する意欲が根拠にあってのことであるかもしれない。ただし、楽団の技能のレベルについて行けるか、不安を持つ6名については何らかの手だてが必要であろう。

3　趣味から文化活動へ

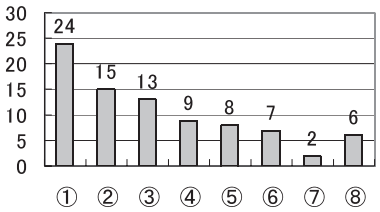
音楽に取り組む人、楽器の演奏を楽しもうとする人々にとっては、共に演奏する集団を求め、合奏しながら楽しみたいという欲求がその原動力になっていることが、この調査結果で明らかになってきた。そして、楽団に所属することによって、さらに自らの技能を高める喜びになる、ということも明らかになった。

ところで、こうして結集した楽団としてのエネルギーが、その次の行動すなわち、演奏する際の聴衆に向けて、あるいは発表とどのように結びついて発展していくのであろうか、ということを考えてみたい。推測できることは、少なくともまずは身内や友人を集めてごく内輪で演奏を披露することは想像に難くない。それがどのような広がりを見せて発展していくのだろうか。

(1)　音楽技能の向上とアイデンティティーのレベルとの関係

ここでは、この楽団の魅力となるものは何かを聞いてみた。

あなたにとって、他のオーケストラにはないこの楽団の魅力とは何ですか？　他の団を知らない方は、直感でも結構です。思いあたるものを選んでください。（○3つ以内）	St	Br	計
①あまり練習できず下手でも、あるいは間違えても、優しく温かで寛容な雰囲気がある。	12	12	24
②単なる定期演奏会だけにとどまることなく、福祉や地域の演奏など、地域コミュニケーションや社会参加なども考えながら団の運営をしている。	7	8	15
③入団に際しオーディションなどせず、パートのバランスが許す限り、本人の希望を大切にする。	7	6	13
④楽器の特性上、より困難である弦楽器に対して、手厚い指導を心がけている。	5	4	9
⑤演奏会はパート･バランスをを考えるためにトラを頼むことをせず、ありのままの姿を見せる点。	4	4	8
⑥団員全体のレベルを考え、技能面ではあまり無理なく、それでいて演奏し応えのある曲を選ぶ。	2	5	7
⑦交響曲などの大曲は年一回の定期演奏会とし、練習への負担がかからないように配慮している。	2	0	2
⑧その他　St：演奏、技能のことのみならず、練習への参加、団員同士のコミュニケーション、人間関係、いろいろな意味で寛容である。／St：遠距離参加だが、創立時より参加し愛着がある。この団の人のつながりに嫌なところがないからです。／St：一人ひとりに役割を与えて、達成していく一員と思えること。／St：自主的な運営で、一緒に取り組むところ。／Br：背伸びすることなく、団員みんなで協力して団を運営しているという空気があること。／Br：音楽を楽しむことに配慮している。	4	2	6



①と③の「間違えても、優しく温かで寛容な雰囲気」「入団に際しオーディションなどせず」では、向上心はあるものの、あまり音楽に厳しくない居心地のよさを求めていることがわかる。また「より困難である弦楽器に対して、手厚い」には、弦楽器も管打楽器も少ないが同数で理解を示している。

上位の①と③の回答に考察を加えてみよう。成人音楽活動に取り組む人のなかには自分の技能評価を受けることを回避しつつ、居心地のよい仲間の環境を求める気持ちは、多かれ少なかれ誰にでもあるものである。ただし、この傾向が強過ぎれば音楽技能の向上は望むことはできないし、逆に向上心が強過ぎれば人間関係が味気なくなるなど、その兼ね合いこそが難しくも大切であり、それぞれの楽団の運営のあり方までも関係してくるのである。

ここで注目されることは、自己満足では終わらせないとする気持ちである。すなわち

「福祉や地域の演奏など、地域コミュニケーションや社会参加」が良い点であるという考えを持っている人が15人（17.9％）いることである。ただし、こうした社会参加への積極的な姿勢は、団員の支持・協力なしにはなかなか実現しにくいものである。しかしそれをのりこえ、このような活動にまで発展させて取り組んでいる団体は、他にも見ることができる。以下、その例を紹介したい。

(2) 楽団としての社会参加の現状

調査に協力された団体と同じように、H市内で活動する他の団体も調べてみた。現在、同市には、Hフィルハーモニー管弦楽団、M管弦楽団、Hシティオーケストラ、アンサンブル“アマディウス”Tama、Mフィルハーモニー（結成年代順）の５団体が活動している。この５団体のうち、３団体が楽団のホームページで、学校・諸施設・地域での演奏活動を明記しているので、以下掲載する。

Hフィルハーモニー管弦楽団　　１９８３年結成	最近の演奏曲目
楽団の紹介　（ホームページ部分引用） H市内では初めてのアマチュア・オーケストラとして、1983年に有志が呼びかけ、その記事が大手新聞に載ったため「市民による本格的なオーケストラ」発足の集いには多くの同好の志が集まり結成された。　地元小学校の音楽室を借りての練習を経て、翌年7月には第1回定期演奏会を開く。現在では年2回の定期演奏会の他に依頼演奏会や、地元小中学校の音楽教室など市民のための演奏活動を行っている。 平成元年の「大喪の礼」で唯一の民間音楽団体として、ベートーベンの「英雄」第二楽章を演奏し、テレビなど紹介された。また、1999年に海外アマチュアオーケストラとの交流演奏会を催すなど、活動の場を広げている。	○2005.5.28　第33回定期演奏会　ムソルグスキー 交響詩「禿山の一夜」／チャイコフスキー バレエ組曲「くるみ割り人形」／リムスキー＝コルサコフ 交響組曲「シェヘラザード」 ○2005.11.23　第34回定期演奏会　マーラー交響曲第１番「巨人」／リヒャルト・シュトラウス　ホルン協奏曲第１番作品11 ／ブラームス　ハンガリー舞曲より第1･5･6番 ○2006.4.9　第35回定期演奏会　ヴェルディ 歌劇「運命の力」序曲／.チャイコフスキー イタリア奇想曲／メンデルスゾーン 交響曲第4番「イタリア」 ○2006.11.19　第36回定期演奏会　ロッシーニ 歌劇「どろぼうかささぎ」序曲／.ベートーヴェン 交響曲第5番／シベリウス 交響曲第2番

Hシティオーケストラ　　１９９８年結成	最近の演奏曲目
楽団の紹介（ホームページ部分引用） 楽器経験を問わず、だれでも入ることができるアマチュア・オーケストラとして誕生した。1999年7月に第1回定期演奏会を開催し、以来、年2回のコンサートを開催。 他に、地域とのコミュニケーションを目的に、演奏の場を広げていきたいと考えている。過去、お祭りやイベントの他、福祉施設などでも演奏。	○2005年 7月第7回定期演奏会：アメージンググレース（スコットランド民謡）／劇音楽「ロザムンデ」より（シューベルト）／交響曲第5番「運命」(ハ短調)(ベートーベン) ○2005年12月 第6回クリスマスコンサート：交響曲「未完成」(ロ短調)(シューベルト）／フォスターメドレー(フォスター)／ムーン・リバー(ヘンリー・マンシーニ)／スターウォーズより（ジョン・ウイリアムス）／イースターカンタータ（バッハ）／戦場のメリークリスマス（坂本龍一）／クリスマスフェスティバル（アンダーソン） ○2006年 7月 第8回定期演奏会:歌劇「魔笛」序曲（モーツァルト)／ペルシャの市場にて（ケテルビー）／交響曲第１番「春」(シューマン) ○2006年12月 第7回クリスマスコンサート：アルジェのイタリア女　序曲（ロッシーニ）／アヴェ・ヴェルム・コルプス（モーツァルト）／アヴェ･マリア（シューベルト）／ハレルヤ（ヘンデル）／「ハウルの動く城」より（久石譲)／ビートルズメドレー(ビートルズ)／サンドペーパーバレエ（アンダーソン）／ホワイトクリスマス（バーリン）／クリスマスフェスティバル（アンダーソン）

Mフィルハーモニー　　２００５年結成	最近の演奏曲目
楽団の紹介　（ホームページ部分引用） 多摩地区の最も新しいアマチュア・オーケストラのひとつ。2005年10月より活動を始め、H市M地域を拠点としている。約30人程度と小規模。2006年秋に第１回定期演奏会を終え，2007年10月28に第2回定期演奏会を開催する予定。また、有志によるボランティアの訪問演奏を展開しており、C市内の老人ホームを訪問し、月２回の頻度で演奏活動をしている。	第２回定期演奏会 2007年10月28日 ベートーベン作曲交響曲第6番田園　ほか

たとえば、Hフィルハーモニー管弦楽団では「地元小中学校の音楽教室など市民のための演奏活動」と書いている。Hシティオーケストラでは「地域とのコミュニケーションを目的に、演奏の場を広げていきたいと考えている。過去、お祭りやイベントの他、福祉施設などでも演奏」と書いている。またMフィルハーモニーでは「有志によるボランティアの訪問演奏を展開しており、調布市内の老人ホームを訪問」と書くなど、それぞれの楽団

の発想と、できる範囲での社会参加を行っていることがわかる。

4　各団体に共通する課題

各団体の結成時期の傾向や、共通している課題を明らかにするために、その対象とする調査の範囲をさらに広げた。東京都の西部となる多摩地区には現在、44以上のアマチュア・オーケストラが活動している。実際には、調査した44団体よりももっと多くの団体が活動していたが、明らかに室内楽であったり、大学の学生オーケストラのように仲間内だけで活動する団体については除外した。ただし、大学 OB の名称であつても広く市民への門戸を開いて活動したり、室内楽団という名称でも管弦楽団であると判断できるものを含めるなどして、44団体に確定した。調査するなかで、メールの問い合わせに応じられた東村山交響楽団の担当の方が「多摩地区はオーケストラ銀座ですからね」とコメントを寄せたほど、数多くの団体が活動している地域である。

(1)　各団体の結成時期から見られる傾向

右の表は、この地区に活動する44団体のアマチュア・オーケストラを結成年の順に並べたものである。またその下は、それを年代を追って関連する出来事とともに年表にしたものである。

多摩地区で終戦後、最も早く結成されたのは三鷹市管弦楽団であった。その翌年に清瀬管弦楽団が結成された。そしておよそ10年間は、二つの楽団だけの活動が続いたが、1971年には社会教育審議会によって「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」の答申が出されたその2年後に、くにたち（国立）市民オーケストラが13年ぶりに結成（1973年）された。

その後は1994年までの21年もの間には、毎年平均１団体のペースで結成されるという、かなり急激な増加となったである。そして1990年には、中央教育審議会の「生涯学習の基盤整備について」答申が出され、1995年の「音楽文化の

【調査の対象とした楽団】 ４４団体

1957	三鷹市管弦楽団	
1958	清瀬管弦楽団	
1973	くにたち市民オーケストラ	（国立）
1974	町田フィルハーモニー交響楽団	
1975	武蔵野市民交響楽団	
1976	多摩管弦楽団	
1978	立川管弦楽団	
1979	府中市民交響楽団	
1981	東村山交響楽団	
1981	調布フィルハーモニー管弦楽団	
1983	小金井市民オーケストラ	
1983	八王子フィルハーモニー管弦楽団	
1984	東京農工大学OB管弦楽団	（府中）
1985	日野市民オーケストラ	
1986	南大沢管弦楽団	（八王子）
1987	国分寺フィルハーモニー管弦楽団	
1990	小平市民オーケストラ	
1990	羽村フィルハーモニー管弦楽団	
1991	東久留米交響楽団	
1992	稲城フィルハーモニー管弦楽団	
1993	TAMA21交響楽団	（立川）
1994	西東京交響楽団	
1995	国分寺チェンバーオーケストラ	
1995	フィルハーモニカ・イン・ヴァルト	（多摩）
1995	吉祥寺フィルハーモニーオーケストラ	（武蔵野）
1996	狛江フィルハーモニー管弦楽団	
1996	多摩ユースオーケストラ	（青少年）
1997	アンサンブル・プロムジカ	（地域不定）
1998	昭島管弦楽団	
1998	アンサンブル"アマデウズ"Tama	（八王子）
1998	八王子シティオーケストラ	
1998	西東京フィルハーモニーオーケストラ	
1999	みたかジュニア・オーケストラ	（三鷹）
2001	あきる野シティー・チェンバーオーケストラ	
2001	クレセント・フィルハーモニー管弦楽団	（地域不定）
2001	MFL管弦楽団	（小金井）
2001	オーケストラムジマ	（国分寺）
2001	武蔵野室内合奏団	
2003	オーケストラ・ルゼル	（地域不定）
2004	FLUSSシンフォニカ	（町田）
2005	ARCチェンバーオーケストラ	（小平）
2005	南大沢フィルハーモニーオーケストラ	（八王子）
2005	多摩ファミリーオーケストラ	（日野）
結成不明	毘沙門天管弦楽団	（地域不定）

※　活動地域の特定は練習会場・演奏会場で判断。４団体は地域の特定が不能。

多摩地区における アマチュア・オーケストラ結成の動き　　2007.4.30 現在

		参考となるできごと			参考となるできごと
1945			5	◎	
6			6	◎	
7			7		
8			8	◎	
9		・「社会教育法」の制定	9	◎	
1950			1980		
1			1	◎◎	・中央教育審議会「生涯学習について」答申
2			2		
3			3	◎◎	
4			4	◎	
5			5	◎	・臨時教育審議会「教育改革に関する第一次答申」
6			6	◎	
7	◎		7	◎	
8	◎		8		・文部省、生涯学習局設置、生涯学習振興課を新設
9			9		・「学習指導要領」の改訂、新しい学力観を提示
1960			1990	◎◎	・中央教育審議会「生涯学習の基盤整備について」答申
1			1	◎	
2			2	◎	
3			3	◎	
4			4	◎	・いわゆる「音楽振興法」の制定
5			5	◎◎◎	
6		・ユネスコ「生涯学習」を提唱	6	◎◎	
7			7	◎	
8			8	◎◎◎◎	・中央教育審議会答申「生きる力」を提示
9			9	◎	
1970			2000		
1		・社会教育審議会「急激な社会構造の～」答申	1	◎◎◎◎◎	
2			2		
3	◎		3	◎	
4	◎		4	◎	
			5	◎◎◎	
			6		

◎＝オーケストラの結成１件とする　（問い合わせに応じず結成年不明の団体は１）

振興のための学習環境の整備に関する法律」の制定の翌年からは、オーケストラ結成の勢いはさらに増し、年平均2団体という信じられないほどの増加数を辿りつつ、バブル経済の破綻の影響すら感じさせない勢いとなって、今日に至っている。以上から見られる傾向は、さらに調査する必要はあるが、生涯学習への法的整備の流れと無関係ではないようにも見える。

(2) 募集状況からみた課題

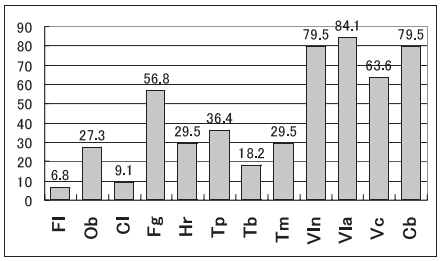
この多摩地区のアマチュア･オーケストラでは、それぞれが活発に演奏活動を行っているところであるが、その団体すべての募集状況に注目して調べてみた。調査の方法は、各団体が開設しているホームページを参照したものだが、不明なところにはメールで問い合わせをしながら回答を得たものである。つぎの表は、その44団体のパート別募集件数である。

【各楽団のパート募集件数】

パート名	件数	%
フルート	3	6.8
オーボェ	12	27.3
クラリネット	4	9.1
ファゴット	25	56.8
ホルン	13	29.5
トランペット	16	36.4
トロンボーン	8	18.2
ティンパニ・Perc	13	29.5
バイオリン	35	79.5
ビオラ	37	84.1
チェロ	28	63.6
コントラバス	35	79.5

※募集件数は、対象とした 44 団体のうちで募集している団体数。

（2007.4.30 調べ）



団体によっては「バイオリン２名、ビオラ４名」というように、人数までを明らかにしていたものもあったが、全体として正確に掌握するためには、すべての団体が回答を寄せてくれることが条件となるためきわめて困難であるので、募集人数ではなく募集パート名があれば、これを１件とした。つまり、「バイオリン２名」も「ビオラ４名」もすべて「１件」として算定した。

弦楽器各パートの募集件数はいずれも多摩地区の団体の半数以上に及んでおり、管打楽器との募集数値の差も著しいことがわかる。これを地区全体における慢性的な弦楽器不足と捉えることができると思われる。とりわけビオラの不足は、全パートの最高値である84.1％を示している。

(3) 弦楽器が不足する原因

なぜ募集人員がこのようにアンバランスになるのであろうか。前述した２の（1）における、Ｈシティオーケストラ楽団員の、音楽の学習経験について述べた箇所を、再度見ていただきたい。そこに現れた数値であるが、弦楽器の方々における12歳までの学校外の音楽学習の経験は、100％（16名）が何らかの音楽に取り組んでおり、そのうち、すでに弦楽器への取り組みを始めている人が７名（43％）いる。これに比べて、学校での活動は、小学校では合唱クラブが1名、中学校では先生にピアノを習うと記された2名だけであり、小・中学校においての弦楽器経験は皆無である。さらに13歳以上に目を転じてみると、高校では管弦楽部が１名と吹奏楽部が１名、大学では管弦楽部が４名と合唱部が２名となっており、音楽活動への参加者は8名であるがそのうち弦楽器経験者は高校・大学で延べ5名とする、いずれも少ない数値となっている。これに比べ管打楽器は、学校外の取り組みとして小学校までに取り組んだのは７名ではあるが、中学校の吹奏楽の経験者は14名に及んでいる。現役楽団員のうち管打楽器担当の87.5％の人は、すでに中学校で経験しているのである。

以下は、現在のオーケストラで担当している楽器をはじめた動機について聞いたところの回答である。

現在オーケストラで 担当している楽器を始めた動機

弦　楽　器		管・打楽器	
Vln	小学生の時、近くの幼稚園でやっていた。	Fl	40代に、音色に魅力を感じて。
Vln	子育てが一段落で、またやりたくなった。	Fl	中学校の吹奏楽部で担当した。
Vln	ヤマハの広告を見て、50歳になつてから。	Obe	高校の吹奏楽部で担当した。
Vln	６歳の頃に、公民館で演奏会を聴いて。	Cl	音楽教室で習う。（中学吹奏楽部：ASax）
Vln	９歳の時「音楽を習いたい」と言った。	Cl	音楽教室で習う。（中学吹奏楽部：Fl）
Vln	小学生の時に、母親の勧めで始めた。	Fg	高校の吹奏楽部で担当した。
Vln	諏訪内晶子さんのｺﾝﾁｪﾙﾄを聴いて感動し。	Fg	入団したら教われた。（中･高吹奏楽部：Hor）
Vln	戦後、兄がやめた楽器を弾き始め。	Fg	空白パートなので頼まれた。（中学音楽教員）
Vln	５歳でPiを。ﾒﾝﾃﾞﾙｽｿﾞｰﾝの協奏曲を聴き。	Hor	中学校の吹奏楽部で担当した。
Vln	友人がアマオケの人を紹介、習い始めた。	Hor	中学校の吹奏楽部で担当した。
Vla	ﾊﾟｰﾄﾊﾞﾗﾝｽを考えてVlnから転向。×２人	Trp	音楽教室で習う。（中学吹奏楽部：Fl）
Vc	楽器の音色が好きだから。	Trp	高校の吹奏楽部で担当した。
Vc	Vln希望したが年齢から無理と言われ変更。	Trb	音楽教室で習う。
CB	高音楽器に飽き。Jazzもやりたかったので。	Trb	中学校の吹奏楽部で担当した。
		Trb	入団してから始める。（中･高吹奏楽部：Cla）
		Tmp	中学校の吹奏楽部でPercを担当した。

ここからも明らかなように、管打楽器はその殆どが学校で経験してきたのに比べ、弦楽器は音楽には関心を持っていたものの、学校では経験する機会を与えられなかったか、参加できる場がなかったといえる。今日、周囲を見れば中学校や高校、そして大学にも管弦楽部が見あたらないわけではない。しかし、調査で回答を寄せた16名の弦楽器担当者のうちでは、高校で１名、大学で４名（延べ人数）という数値から考えられるように、学校における経験者が少ないことが、弦楽器不足を招いていると考えられる。

5　まとめにかえて

調査の規模はやや少人数であったが、以下の点について明らかにすることができた。また、今回明らかにしたくとも不十分であった点と、今後の課題についてふれておきたい。

(1)　意欲と向上心への配慮

オーケストラ参加への動機となったことは、オーケストラの演奏を鑑賞するだけではなく、自ら楽曲を演奏するなかで作品とふれあい、オーケストラを自分の手にしたいという発想により生じたものである。そのなかには、音楽の技能獲得への向上心や「音楽にあふれた生活によって潤い」を求めていることも当然ではあるが、さらに「新しい仲間や自分の行動範囲の広がり、新たな自分の発見、ストレス発散、新たな自分の居場所、休日の有効活用など」を含んだものであることが明らかになった。

(2)　弦楽器と管打楽器のちがいへの配慮

調査の結果からは、弦楽器と管打楽器とでは明らかに異なった点について、その違いから日頃の練習のあり方や配慮すべき点について以下①、②を例として見いだすことができないだろうか。

①　音楽学習の経過について管打楽器は、その87％以上が学校における吹奏楽部の活動から学習したことに比べ、弦楽器は学校で学習した経験が少ないことである。弦楽器を学習するきっかけとなったことは、子どもの頃から家庭環境によって音楽や弦楽器に接したためか、または成人になってから好きではじめたかなど、音楽への憧れを持っていたことが

何かをきっかけとして楽器を持つまでに至ったという例が多く、さまざまな学習の経過を持っている。

② オーケストラにおいては、弦楽器の演奏すべき量が多いことにより、練習における負担度が大きい。そのための技能面での支援と配慮が必要となるだろう。

また管楽器の練習にあたっては、楽曲の全体像を把握させて演奏に加わるタイミングに慣れさせることなど、音楽全体をイメージできる支援が必要であると思われる。

(3) 弦楽器を養成するために

調査からも明らかなように、弦楽器への募集数については、多摩地区だけでも全体の半数以上を超えているほど、弦楽器の不足が目立っていることである。いいかえるなら、アマチュア・オーケストラの音楽活動を支えていくための課題の第1は、弦楽器に取り組む人を育て増やす活動をすすめることではないかと考えられる。弦楽器養成としてふさわしい学習の場として思いつくことは、学校における吹奏楽部のように手軽に学習できる場を設けることや、青少年からの弦楽器育成も視野に入れる必要があるのではないだろうか。

(4) 地域コミュニテイーと社会参加

多くのアマチュアの演奏団体が、定期演奏会はもとより小編成による演奏会を開くことが多いため、その演奏場所を求めて広く地域に繰り出すようになった。その結果、地域の園や学校、そして諸施設への訪問演奏などが、楽団の活動として大切にされるようになったのである。すなわち、これらによる活動が音楽による交流と地域コミュニティーの活性化や、社会参加への発展として捉えることができるであろう[3)]。

(5) 今後の課題

最後に、本論文で明らかにできなかったことについてふれておきたい。

第１は、アマチュア・オーケストラの活動にとって困難なことは、管弦楽曲における作品のオリジナル重視と、アマチュア・オーケストラの活動の難しさとの関連が浮き彫りにできなかった点である。これは、オーケストラ以外のアマチュア楽団との比較によって得られるものであろうが、今回は及ばなかった。

第２は、アマチュア・オーケストラで取り組む楽曲と活動の関係である。冒頭に述べたとおり選曲の難しさとともに、取り組む楽曲によっては演奏に参加できないパート（いわゆる「降り番」）があった場合の対応等について、その実態を明らかにできなかった。

第３は、戦後のアマチュア・オーケストラの結成と、生涯学習における行政の諸施策との関連である。

これには４の（1）において２つの表で示したとおり、1973年から1994年までの21年もの間には、毎年平均１団体のペースで結成され、さらに1996年から今日に至るまで年平均2団体が結成されるという増加数を辿っていることが明らかになった。こうした動きと1990年の中央教育審議会「生涯学習の基盤整備について」答申や、1995年「音楽文化の振興のための学習環境の整備に関する法律」の制定等に代表される、生涯学習に関する諸施策の実施が該当する。

第４は、弦楽器奏者養成の課題である。学校教育においては吹奏楽部の活動が盛んであることにより、市民吹奏楽団やアマチュア・オーケストラの管・打楽器各パートは、ある程度充足していることが明らかになったが、弦楽器に触れさせる機会を提供する場はきわめて少ないといわざるを得ない状況にある。こうした機会を、どこでどのようにして増や

すのかという検討が必要と考えている。

なお、この研究に取り組むに当たっては、当然のことながら、アマチュア・オーケストラの生成と展開について資料を発掘し、調査に基づく論述が必要であったが、力量不足のために今回は断念せざるを得なかった。また実態調査の方法論－視点と手続き－についての検討も今後の課題としたい。

【注】

1）ドミートリイ・ドミートリエヴィチ・ショスタコーヴィチ（1906 ～ 1975・ロシア）の作品のなかから、人数を最も必要とする交響曲第4番ハ短調作品43の編成を例にあげる。

木管楽器（ピッコロ2・フルート4・オーボエ4（うちイングリッシュホルン持ち替え1）、ソプラニーノクラリネット1・クラリネット4・バスクラリネット1、ファゴット3・コントラファゴット1）、金管楽器（ホルン8、トランペット4、トロンボーン3、チューバ2）打楽器（ティンパニ2・合せシンバル・懸垂シンバル・トライアングル・大太鼓・小太鼓・シロフォン・タムタム・グロッケンシュピール・チェレスタ・カスタネット・ホルツトン）、弦楽器（弦五部）第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、ハープ2となっている。編成は130名を超す演奏者となる。

2）海老沢敏他著（1990年）「モーツァルト全集」小学館　の記述から、モーツァルトの交響曲および、それに準ずる楽曲の編成を表にしたものである。

モーツァルトが作曲を始めた1764年から、最後に作曲した1788年の交響曲第41番「ジュピター」まで、わずか22年の間においても、楽器の種類と人数が増えていることがわかる。弦楽器は第1バイオリン、第２バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバスの５部から成るが、各パートの人数については、管楽器の音量に見合うだけの数が必要となるため、増やされることが通常である。

この時代においては、ファゴット、ティンパニ、チェンバロの楽器が弦楽器群として区分されていた。今日では、後半の作品においてはチェンバロを使用することはあまりない。

モーツァルトの交響曲作品にみる 楽器編成の変遷

作曲年	曲　　名	Fl	Ob	Cl	Fg	Hor	Trp	Tmp	弦楽器	Fg	Tmp	Cemb
1764 or5	交響曲第１番 変ホ長調 K.16		2			2			弦楽器	○		○
1765	交響曲第４番 ニ長調 K.19		2			2			弦楽器	○		○
1765	交響曲　　ヘ長調 K.Anh223(19a)		2			2			弦楽器	○		○
1765	交響曲第５番 変ロ長調 K.22		2			2			弦楽器	○		○
1767	交響曲第６番 ヘ長調 K.43		2			2			弦楽器	○		○
1768	交響曲第７番 二長調 K.45		2			2	2	○	弦楽器	○		○
1767	交響曲ト長調 K.Anh.214「新ランバッハ」		2			2			弦楽器	○		○
1766	交響曲ト長調 K.Anh.221(45a)「旧ﾗﾝﾊﾞｯﾊ」		2			2			弦楽器	○		○
1768？	交響曲変ロ長調 K.Anh.214(45b)		2			2			弦楽器	○		○
1768	交響曲第８番 二長調 K.48		2			2	2	○	弦楽器	○		○
1770	メヌエット イ長調(61g) 1番	2							弦楽器	○		○
1772？	交響曲第９番 ハ長調 K.73	(2)=2				2	2	○	弦楽器	○		○
1769-70？	交響曲第10番 ト長調 K.74		2			2			弦楽器	○		○
1771？	交響曲　　ヘ長調 K.75		2			2			弦楽器	○		○
1767？	交響曲　　ヘ長調 K.76(42a)		2		2	2			弦楽器			○
1775以前	交響曲　　二長調 K.81(73l)		2			2			弦楽器	○		○
1770？	交響曲第11番 二長調 K.84(73q)		2			2			弦楽器	○		○
1767？	交響曲　　二長調 K.95(73n)	(2)=2				2	2		弦楽器	○	○	○
1771	交響曲　　ハ長調 K.96(111b)		2			2	2	○	弦楽器	○		○
1770？	交響曲　　二長調 K.97(73m)		2			2	2	○	弦楽器	○		○
1771	交響曲第12番 ト長調 K.110（75b）	(2)=2			2	2			弦楽器			○
1771	交響曲第13番 ヘ長調 K.112		2			2			弦楽器	○		○
1771	交響曲第14番 イ長調 K.114	(2)=2				2			弦楽器	○		○
1772	交響曲第15番 ト長調 K.124		2			2			弦楽器	○		○
1772	交響曲第16番 ハ長調 K.128		2			2			弦楽器	○		○
1772	交響曲第17番 ト長調 K.129		2			2			弦楽器	○		○
1772	交響曲第18番 ヘ長調 K.130	2				4			弦楽器	○		○
1772	交響曲第19番 変ホ長調 K.132		2			4			弦楽器	○		○
1772	ｱﾝﾀﾞﾝﾃｨｰﾉ・ｸﾞﾗﾂｨｵｰｿﾞ（K.132第２楽章初稿）					2			弦楽器	○		○
1772	交響曲第20番 ニ長調 K.133	(1)=2				2	2		弦楽器	○	○	○
1772	交響曲　　ニ長調 K.126.161.163(141a)	2	2			2	2		弦楽器	○	○	○
1771-2？	交響曲　　ニ長調 K.111.120.(111a)	2	2			2	2	○	弦楽器	○		○
1775	交響曲　　ニ長調 K.196.121.(207a)		2			2			弦楽器	○		○
1775	交響曲　　ハ長調 K.208.102.(213C)		2			2	2		弦楽器	○		○
1772	交響曲第21番 イ長調 K.134	2				2			弦楽器	○		○
1773？	交響曲第22番 ハ長調 K.162		2			2	2		弦楽器	○	○	○
1773	交響曲第23番 二長調 K.181(162b)		2			2	2		弦楽器	○	○	○
1773	交響曲第24番 変ロ長調 K.182(173dA)	(2)=2				2			弦楽器	○		○
1773	交響曲第25番 ト短調 K.183(173dB)		2		2	4			弦楽器			○
1773	交響曲第26番 変ホ長調 K.184(161a)	2	2		2	2	2		弦楽器		○	○
1773	交響曲第27番 ト長調 K.199(161b)	2				2			弦楽器	○		○
1774？	交響曲第28番 ハ長調 K.200(189k)		2			2	2	○	弦楽器	○		○
1774	交響曲第29番 イ長調 K.201(186a)		2			2			弦楽器	○		○
1774	交響曲第30番 ニ長調 K.202(186b)		2			2	2		弦楽器	○	○	○
1778	交響曲第31番二長調 K297(300a)「パリ」	2	2	2	2	2	2	○	弦楽器			
1778	K.297へのアンダンテ	1	1		1	2			弦楽器			
1779	交響曲第32番ト長調 K318	2	2		2	4	2		弦楽器		○	
1779	交響曲第33番変ロ長調 K319		2		2	2			弦楽器			○
1780	交響曲第34番ハ長調 K338		2		2	2	2	○	弦楽器			○
1782	交響曲第35番二長調 K385「ハフナー」	2組	2	2組	2	2	2	○	弦楽器			○
1783	交響曲第36番ハ長調 K425「リンツ」		2		2	2	2	○	弦楽器			○
1782	メヌエット ハ長調 K.409(383f)	2	2		2	2	2	○	弦楽器			○
1784	交響曲第37番 ト長調 K.444(425a) M.ハイドンの交響曲への序奏		2			2			弦楽器	○		○
1786	交響曲第38番二長調 K504「プラハ」	2	2		2	2	2	○	弦楽器			○
1788	交響曲第39番変ホ長調 K543	1	2	2	2	2	2	○	弦楽器			○
1788	交響曲第40番ト短調 K550	1	2	2組	2	2	2		弦楽器			○
1788	交響曲第41番ハ長調 K551「ジュピター」	1	2		2	2	2	○	弦楽器			○

３）高萩保治・中嶋恒夫編著（2000年)「音楽の生涯学習」玉川大学出版部（23ページ）において、つぎのように指摘している。「行政主導型のまちづくりから、住民主導型ないし官民協力のまちづくりが始まったといってよい。そしてその際のキーワードが『住民の生涯学習活動』なのだというのが今日の常識である。」「お役所任せでなく、住民たちが学習活動をして、その学習成果を生かして地域作りに参画する。真の自治といえよう。」つまり、音楽を媒体として人々のコミュニケーションが、楽団内部はもとより、地域にも図ることへの発展的な可能性を示していると考えられる。

謝辞

本論文を作成するにあたっては、八王子シィティオーケストラのメンバーの方々に、練習の合間を割いていただくなどして、意識調査のアンケートにご協力いただいた。また、多摩地区で活動しているアマチュア・オーケストラの広報担当の方々にも、問い合わせやインタビューに快く応じていただいた。これらの方々の多大なご協力に対し、心からお礼申し上げたいと思う。そして、論文をまとめるに際しては、恩師河口道朗先生（東京学芸大学名誉教授・博士〔教育学〕）に、終始、懇切丁寧なご指導を賜った。衰心より謝意を表する次第である。

Summary

Wataru Suzuki:
Examining Adult Musical Group Activities
--A focus on the activities of amateur orchestras--

This paper illustrates the actual situation and challenges faced by adult musical groups, particularly, amateur orchestras. The aim of this paper is to propose ways to improve and support their activities. The author researched on the H City Orchestra, a musical group the author is involved in, and discusses and summarizes this case study in the paper. In particular, the author focuses on the motivation behind members' musical performances and practice sessions. Furthermore, the author researches on the proper future course for orchestra activities and sheds light on the path its members wish to see taken. Moreover, by extending the scope of research to 44 bands in the westerm part on west area of Tokyo, in Tama district, and taking up concerns shared by each of these groups, especially particular articulating the challenges faced when recruiting members, this paper discusses the future and ways of assisting adult orchestra activities.